



津田左右吉物語①

左右吉四歳で四書を読む

明治6年(1873)生まれの左右吉は、四歳で父藤馬より四書の素読そどくを習い、その要点を暗唱するまでになっていました。素読とは文の意味を考えず、文字だけを見て音読することです。

父藤馬は幕末に参勤交代で江戸詰10カ年の任を終わって帰郷しており、中央での新しい知識や情報を身につけていました。

四書とは、論語・孟子・大学・中庸のことで、徳川時代には各藩

の藩学、有名な私塾から寺子屋に至るまで、ほとんどがこれを採用して、講義が行われていました。

後年15歳の時、大谷派普通学校に入学し、学友と手作りの雑誌を作り「漢学の必要を論ず」という一文を書いたのは、幼時からのこうした漢文の読書力の必要性を論じたものでしょう。小学校を一年飛び級し、七年間で卒業できたことも、いわゆる読み、書き、そろばんの三つの力が飛び抜けていたことによると考えられます。



左右吉が使用した四書